

Circle Story of Meiji University

▶▶▶▶▶ 地底研究部 (ケイビング)

洞窟探検とは…その魅力—
さて、まずは明治大学に地底研究部というサークルがあることを皆様はご存知でしょうか。その少々堅い名前からは想像し難い、とても奇妙で冒険心に充ち満ちたサークルです。実は日本には各地に数多くの洞窟が存在し、大別すると観光用に整備された観光洞と、未整備で自然のままの姿を留めた洞窟があります。私達が活動をする未整備の洞窟には、一人がギリギリ通れるような狭路や、切り立った崖も存在します。初めて洞窟を体感した人の中には勿論怖いと感じる人もいるでしょう。しかし、そのほとんどは達成感から目を輝かせて帰還します。前人未到の地へと潜り、その先へ進んだ者のみが目にする事ができる、太古からの自然の営みが造り出す神秘の造形美。これこそ洞窟探検の醍醐味なのです。
更に洞窟探検の魅力は、洞窟の中だけに留まりません。日本ではあまり「ケイビング」(Caving) 洞窟探検) という言葉が耳慣れないように、日本人ケイパーはあまり多くありません。そのため、北は北海道から南は沖縄まで日本全国の大学探検部や社会人

建物壁面を使ったSRT練習



神秘の造形物 (リムストーンプール)



2015年岩手合宿 洞内集合写真

地底研究部(ケイビング)

“洞窟探検”と聞いて、あなたはどんなことをイメージしますか？

私達、地底研究部は1975年創部の歴史ある洞窟探検サークルであり、「東の地底研究部」として、国内外の新洞窟発見における多大な功績を挙げてきました。現在は、関東圏及び岩手県久慈市・住田町をメインフィールドに探検活動をしています。

語り尽くすことのできない洞窟探検、そして地底研究部の楽しさを、この場をお借りして皆様にお伝えできればと思います。

地底研究部公式HP: <http://meijichitei.wix.com/meijichitei>

総合数理学部3年 濱野 佑好(幹事長)

— たくさんの可能性 —
団体の方と交流があります。海外ではケイビングが日本よりもずっとポピュラーであるため、国際交流などもあり、私たち学生にとってはとても刺激的です。ケイパーに限らず、洞窟調査で出会う生物専門家や水質専門家の方や、地域住民の方々との出会いや交流など、洞窟探検を入口に次々と広がる人と人との「つながり」も大きな魅力です。

— 地底研究部の活動は主に「ファンケイビング」と「地域洞窟調査」であり、またその為に必要な技術習得として、洞内でのロープ昇降「SRT」(Single Rope Techniques) や洞内測量技術の練習に日々取り組んでいます。合宿では、奥多摩や岩手県をはじめとした日本各地の洞窟、なかでも鍾乳洞をメインに探検・調査を行っています。

ファンケイビングは、登山やロッククライミング同様にアウトドアスポーツの一面もあり、昨今の観光洞ブームもあって注目が集まっています。洞窟の難易度によって気軽に探検できる場所もあるので、子供や女性にも体感していただけたらと思います。地底研究部にも女性ケイパーが沢山いますので、

Circle Story of Meiji University

▶▶▶▶▶ 地底研究部 (ケイビング)

“穴カール”と銘打って広めていきたいと目論んでいます。

一方の洞窟調査ですが、創部40年の数々の実績を踏まえて今年から、NHK朝ドラ『あまちゃん』で話題となった久慈市の地元住民・教育委員会や警察・消防の協力を得て、一帯の地域調査を任されています。久慈市山根町に広がる石灰岩帯には「安家洞」「龍泉洞」といった有名な鍾乳洞があり、また近隣の山形町には国内第5位の総延長を持つ「内間木洞」など洞窟発見の可能性を秘めた地域であると言えます。その為、1970年代後半から80年代半ばにかけて、幾つかの大学探検部によって久慈市洞穴リストとして発表されていたのですが、その後洞窟群を調査する動きはありませんでした。私達、地底研究部はこの空白を埋め、部の飛躍と地域要請に応えるという目的を持って調査を進めていきたいと考えています。あわせて岩手県エリアは2011年の東日本大震災の影響が大きく残る地域なので、洞窟という見地からの環境保全と安全確保の情報収集も調査活動の目的です。

ということだけではなく、地質、地形、水文、気象などの現象を研究することや、測量、製図などの工学的技術の習得、更に地元における洞窟に関する伝承のヒアリングや古文書の分析を行うと言ったような、理系・文系というジャンルを超えた幅広い活動を行っているという想いからでした。つまり、様々な分野の知識や経験を集大成するという趣旨で「研究」という単語を使ったのです。

設立当時は現代の様なインターネットでの検索など全くないし、図書館に行っても洞窟の専門書はなく、資料としては岩波新書やブルーバックス等の小冊子ぐらいしかありませんでした。しかし逆に言えば、自分たちで道を築こうという自負がありました。いきおい、ずいぶん遠回りもしましたが、今から考えればそれも良い経験だったと思います。

皆がザイル(ロープ)で体を繋ぎ、文字通り命を託しあって探検調査を行い、測量図や報告書を草稿して地元へ提出したときに得られる達成感は、筆舌に尽くし難いものがあります。チームワークがなければ成果を残すことは不可能です。その機会を共有できる空

2014年OBOG懇親会



岩手県久慈市山中にて洞口調査



岩手県白蓮洞にて測量練習

岩手県稲荷穴にて



創部40周年の重み

今年には記念すべき40周年ということで夏合宿ではOBもお呼びし、創部当時の話などをたくさん教えていただきました。40年という時間の流れはとても大きく、初代の方は昨年還暦を迎えております。自分の両親よりも年上の方とつながりがあるというのは、そうないと思います。「寝ている先輩は起こして使え」これはOBの先輩方によく言われる言葉です。その言葉に甘え、今回は初代部員で創部メンバーである田村先輩にご寄稿いただきました。

私達が1975年に地底研究部を創立した時、名称をケイビング部や洞窟探検部としなかった理由には、「他のサークルでは使われていない名称にした」ということがありました。ちなみに今でもインターネットで「地底研究」で検索すると、トップからずっと「明治大学地底研究部」がヒットします。つまり、とてもユニークなネーミングだったのです。

しかし、このネーミングを用いた最も大きな理由は、活動内容が登山や登攀の技術を駆使して洞窟探検を行なう

間を創造することこそ、地底研究部創立の大きな目的でした。

40年前に当部を創立してから今でも変わらないことは、「探検は計画した時から始まる」ということです。探検という活動を通じて「知的好奇心」を持ち続け、なおかつ最善策を講じる作戦を立て実践するという経験は洞窟探検以外でも必ず役に立つと思います。

(寄稿：初代 田村守司)

新たな一歩

現在32名もの部員が所属する地底研究部ですが、これらの多岐に渡る活動をより充実させるべく部内の体制強化に取り組んでいます。部員全員がそれぞれやってみたい・興味のある事のできる場所。そして、その仲間達と命を預け合い、未開の地底に挑む。地底研究部とは、そんなチャレンジを育むサークルだと思います。最後に、次なる50周年に向けて、更には100年200年と悠久の時を刻む洞窟と共に歩んでいく。大袈裟かもしれませんが、そんなサークルになることが地底研究部の夢です。